

# 記憶の波紋

—伐採木利用家具による地歴の継承—

茨城キリスト教学園内に新校舎を建設する際、その敷地調査段階で外来生物法にて要注意外来生物に指定されている樹木が確認され、今後のキャンパス全体の生物育成に配慮し、伐採されることとなった。伐採を余儀なくされたものの、長い年月をかけて生育してきた月日やその風景の記憶は、学園、学生にとって大切な財産である。

本家具はその伐採木を利用し、新しい用途として新校舎のシンボルファニーチャーとして製作したものである。

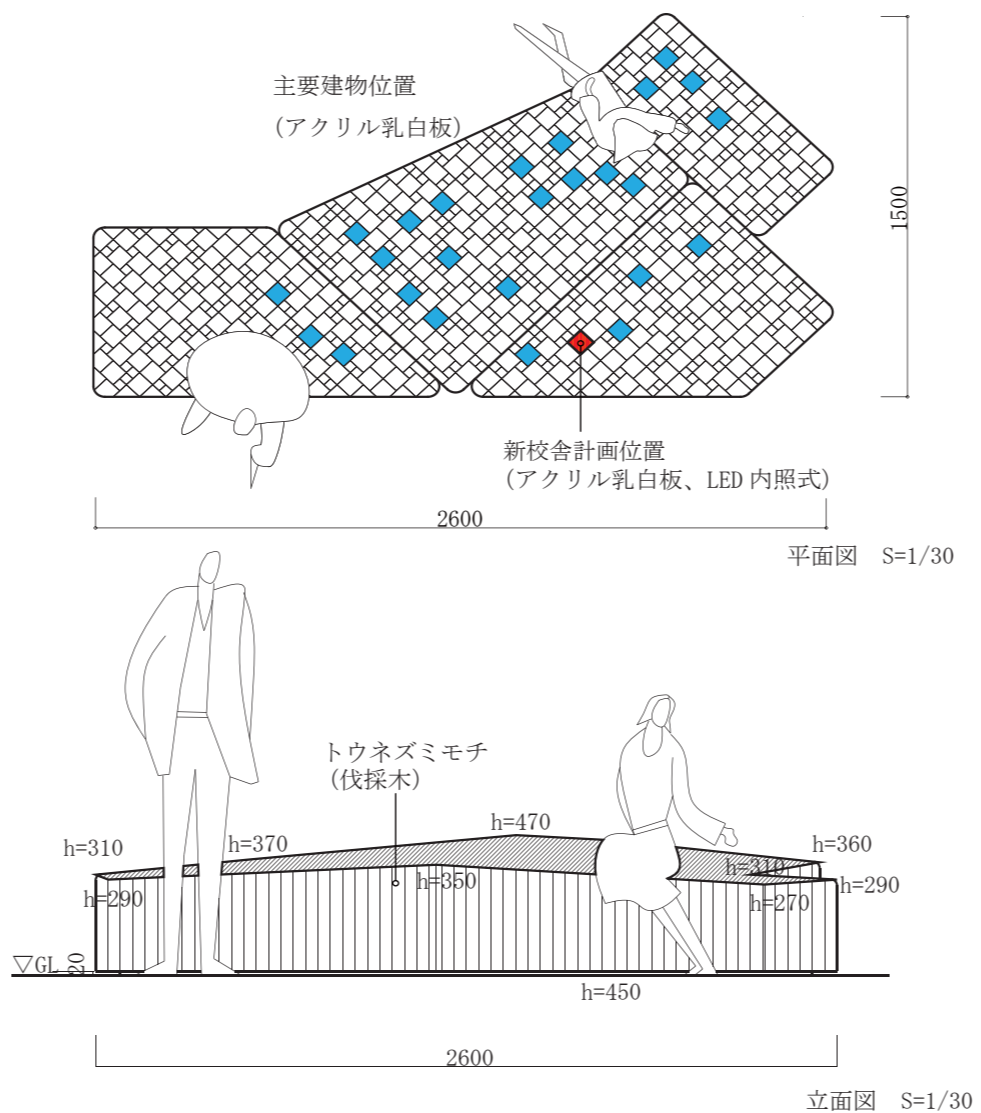
木の持つ温かみや素材感に加え、学園の地歴や風景の記憶を表現すべく、本家具の全体形状、座面高さは、学園全体の敷地形状、高低差をデザイン化している。

また、年輪がまるで水の波紋のように広がった座面には学園の主要建物位置を乳白色アクリル板にてプロットしており、学園の敷地そのものが伐採木の塊として再現された。

学園の歴史とともに生育してきた樹木は、その地歴を継承していくとともに、学生の新たなコミュニケーションの場として生まれ変わり、学園の新しいシンボルとして、また「記憶の波紋」として広がり始め、新しい時間を紡ぎ始めている。



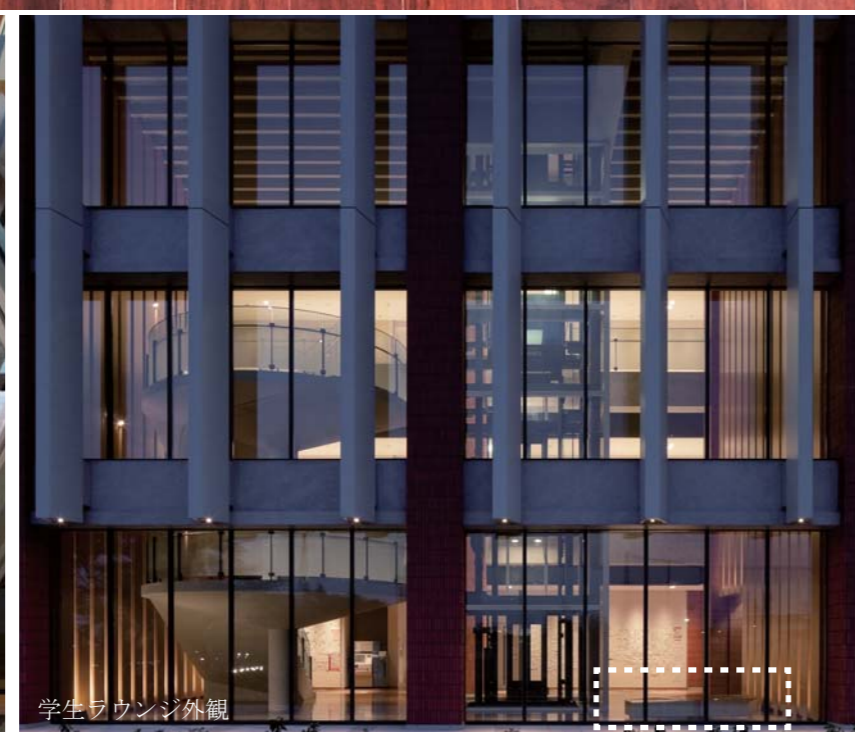
敷地分析ダイアグラム / 茨城キリスト教学園キャンパス内の主要建物、高低差をプロット



シンボルファニーチャーに座って会話をしている学生



木を基調とした温もりのある空間に象徴的に配置された伐採木利用家具



学生フロンジ外観



年輪が集積された座面と学園主要建物位置のプロット (11号館位置のみLED内照式)



4つのピースにて分割することで、家具形状のフレキシビリティと連搬性を確保した



学園敷地の高低差が座面に起伏をつくり、高さに応じて多様なアクティビティを生成する

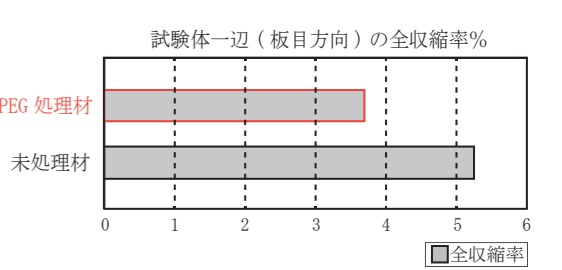
## ■ 製作工程

本家具は全行程日数が67日と制限があり、木材をしっかりと乾燥させる為に、部材の大きさ、厚み等に配慮し、製作寸法、工程を計画した。

- ① 丸太玉切り  
原木をチェーンソーで300~400mm玉切りする。
- ② 角材製材  
玉切りした丸太を手押しかな盤、帯で製材し、ブレンダーで70mm角に切削する。
- ③ 集成加工  
角材を4本ごとに集成して一辺が140mm角のブロックを作製する。
- ④ 板厚製材  
集成したブロックを木口方向に10mmの厚さで切断する。
- ⑤ PEG含浸処理・乾燥  
切断した板をPEGの水溶液に最低30日間浸漬させる。その後、自然状態で4週間程度乾燥させる。
- ⑥ ブレンダー厚み加工  
ブレンダーで板厚を9mmに削る。
- ⑦ 合板加工  
ランバー (t12mm) に集成した板を接着する。

## ■ 材料試験、分析

PEG処理※1材、未処理材における乾燥時の全収縮率を測定し、製作後も経年的に割れ等劣化が起きないことを確認した。



※1 PEG (ポリエチレングリコール) 処理